博士学位請求論文　野網摩利子「夏目漱石中・後期小説における時間の創出」
審査報告書

小森陽一

野網摩利子氏の博士学位請求論文「夏目漱石中・後期小説における時間の創出」は、夏目漱石の小説の内部に張り巡らされた、独自の時間が生動するしくみを理論的に解明し、これまでの漱石研究を質的に大きく前進させた論文である。

漱石は自身の『文学論』で、「文学的内容の形式」を「焦点的印象又は観念」に「情緒」が附着したものであることを要すると宣言している。本論文は漱石の小説における「文学的内容の形式」が小説内的時間のなかでどのように現象するかを検証し、小説にしか語りえない「時間」が、漱石の小説表現の要になっていることを説得的に明らかにした。

この論文の主眼は、登場人物の記憶からの情緒の復起に注目し、それらが小説の時間論として組みなおした点にある。漱石の理論的認識のありかの考察から始められ、18 世紀ヒュームの哲学、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのリボーやウィリアム・ジェイムズの心理学、また、ベルクソンの哲学など、漱石が実際に参照した文献に基づいて、それらを漱石がどのように融合して小説の表現方法として用いたかが示されている。漱石が、現在時の意識と同様、識閾下に落とされた言語的観念や身体的印象にも、それぞれ情緒が附着すると認識し、その認識を小説の表現方法にも生かしたことが、本論文では精緻な表現分析によって明らかにされている。

そのうえで、漱石小説の登場人物は、ある契機の中で識閾下の情緒を強く喚起されると解明した。その契機は当の登場人物にとって他者のものであるところの、諸言語、諸物によってかたちづくられることを本論文は証明している。漱石の理論と実作の緊密な関係を実証した画期的な成果である。

また、登場人物の出会った、文字、書物、書画、口承文学、絵画、宗教的言語の歴史的奥行きについて、徹底的な調査がなされている。禅、浄土教、日蓮宗など中世から続く仏教運動、それぞれの経典ならびに関連書物、能、浄瑠璃といった芸能、近世の書画など文人の教養、古代北欧神話など漱石が留学先で得た文学など、すべて漱石自身が読んだことの確実な漢籍、英語文献にあたって調べたうえで、当該小説内における機能が明かされた。これらはすべて野網氏が初めて論証したものである。

漱石の登場人物は、契機をかたちづくるものに遭遇すると、情緒を震わせ、かつて感じたことのある情緒を呼び出し、連合しはじめる。そのとき、識閾下へ追いやっていた印象、観念が甦り、意識の焦点へと昇り出す。こうした独自の運動が、漱石の小説の筋をめぐる導線を動かしていることが証明されている点も、野網氏の論文の独自性である。

本論文は、登場人物の印象や観念、また、情緒によって再認される時間こそ、小説内部で湧き出し、流れ始める独自な時間であり、それに注目する必要性を強調した。なぜなら、そのような生体ならではの活動を言語化したことが漱石の小説の達成点だからである。すなわち、個別的な「持続」こそが小説の時間だという提示である。

このように漱石の小説の時間創出のしくみを解明することによって、漱石が中・後期小説でなぜ頻繁に、登場人物を語り手、あるいは、手記、手紙、遺書の書き手に据えたかが明らかにされていく。

登場人物でもある語り手や書き手は、語るあるいは書く材料をあらためて印象に刻み、言語的観念で切りとる。小説内部の対象にたいする、語り手あるいは書き手の言語的解釈が、読者との緊張関係をもって小説の読書過程全体を貫いていることを証明したことは、本論文の理論的成果の一つでもある。

こうした叙述形式の取られる理由について、論者は三点指摘する。第一に、かつて聴いた他者の声、目にした文字の想起とともに、現在、語ろう／書きつけようとしている言語が振れ動く運動を記すことができる点。第二に、かつて感じた微細な印象が揺さぶられ、増幅するような感覚に押されて語る／書くという運動を記すことができる点。さらに第三として、現在交渉中の出来事の印象、観念に附着する情緒がかつての情緒を呼び醒まし、語り、書く行為にそれら情緒の附着する運動を記すことができる点である。

つまり、登場人物に感受されている、語るまで、書くまでのプロセスは、各段階での印象や観念、それらに附着する情緒同士の相互浸透を経た時間であって、小説の構造のために分配された時間ではないという形で、新しい小説理論の可能性が示されている。

本論文は、漱石の『文学論』における、新旧の印象又は観念、それに附着する情緒同士がたがいに活性化しあう往還運動こそ、実作における重要な小説内容であることを初めて明確にした。縮約されてつかみなおされる個別的な時間に着目することで、漱石の小説が、他ならぬこの小説でしか実現できない唯一のかたちとしての、登場人物の生を現出させると論じきったのである。

野網氏の論文の、研究史の中における意義はつぎのとおりである。第一に、夏目漱石における中・後期小説において、登場人物の記憶の在り方の叙述が、細部にわたるまで人間の意識の動き方を、リアリティをもって現していると明らかにした。第二に、小説の細部と思われていた諸ディテールが、テーマそのものと結合しうることを明らかにしている。第三に、『文学論』などの理論が、実作の細部にまできわめて意識的に貫かれていると証明し、理論と実践が漱石において統一されていたことを明らかにし点である。

審査の中では、引用原文の翻訳への疑問や、対象とした小説の範囲や論点に対するいくつかの批判も出されたが、野網氏の理論的分析の整合性が評価され、漱石の同時代に即してもまた歴史的にも、野網氏の分析方法が有効であることが検証された。

本論文が、現状における夏目漱石研究の最先端に位置し、今後においても、日本近代文学研究の最前線で活躍する力量を持っていることが、論文審査の過程で確認された。